

戦時下の芸能

木津川 計

はじめに—鬼畜米英

私は戦争中、ここからすぐ近くの紫明小学校に通っていました。当時は国民学校と言いました。私は昭和二〇年、国民学校の四年生で敗戦を迎えました。学校で毎日毎日私どもに先生が教えたことは、「鬼畜米英」ということばでした。アメリカ人やイギリス人は鬼であり畜生ですから、なんぼ殺してもええどころか、鬼の畜生は殺さなければならぬのです。先生は子どもにとっては絶対です。年端も行かない私たちは、「鬼畜米英」を鬼のようにおどろおどろしい赤ら顔の怖い怖い動物、畜生や獣だと思っていたのです。

ある時、珍しく京都の上空で空中戦が展開されたのです。大津の飛行場から飛び立った日本の戦闘機がグラマンというアメリカの戦闘機を撃ち落とすことが、戦争末期に起ったのです。国民学校の私たちは教室の窓から恐る恐る一空中戦はちょうど真上でした—その展開を見守っていました。あろうことか、グラマンが炎に包まれて鞍馬の方へ墜落していくのに歓声を上げました。その時落下傘が一つ浮かびまして、降りてくる先は植物園でした。私たち、およそ千人の子どもたちは先生の許しも得ずに、学校を飛び出し、烏丸通りへ走って行きました。先生も一緒に走って来られました。到着しますと、すでに道にはロープが張られており、市民で一杯でした。あの頃は「烏丸車庫前」が終点でしたが、もう来るぞとはらはらしながら待っていますと、植物園へ降下したアメリカ人—というより一匹の鬼畜です—が捕まえられ、憲兵隊のサイドカーに乗せられてやって来るのが見えました。ざわめきとどよめきです。どんなが鬼畜なのか、私も眼を見開いて、その鬼畜の一匹を見なければならぬと見ていましたら、鬼畜は後ろ手に縛られ、真っ白い布で目隠しをされていました。私の目の前を拉致されていくその鬼畜の横顔を見た時に、私の立っていた鞍馬口の大地がぐらぐら、ぐらぐらと揺れたことを今も覚えているのです。なぜ揺れたかといいますと、彼の横顔は真っ白い布よりももっと白かったのです。あれが鬼畜

か…。真っ赤でなければいけなかったのです。おどろおどろしい形相でなければならぬのに、真っ白い横顔をした鬼を見て、私は先生の言われることに疑問を覚えたのです。

私どもは必勝の信念に燃えていました。田辺聖子さんも軍国少女でしたが、みんながそうだったのです。早く陸軍幼年学校や少年航空兵へ行きたい、日本が負けるはずがないと信じていました。

ある日、「君方は^{きみかた}こういうものを知っておるか」と、国民服に身を固めた、痩せた先生が言われました。そして「へりこぶたあ」とひらがなで書かれましたが、私たちはそれが何か知る由もありませんでした。「知りません」と答えますと、「竹トンボを知っておるか、あれを原理にした飛行機をアメリカは発明したのである。ヘリコプターは滑走路を必要としないから、航空母艦の上にたくさん積載することができ、竹トンボのように上へ上へ水平に飛び攻撃機に早変わりする。そういう飛行機をアメリカは続々今生産中である。わが本土を空襲してくることはそう遠からずであろう。君方少国民は一日も早く成長し、お国のために戦って雄々しく散華しなければならぬ」と言われるのに、身を引き締めながらも、私はその時、「もしかしたら負けるかもしれない」と初めて必勝の信念がぐらついたのです。そんなものを発明されたら、もう勝つ望みはないなあ子ども心に思えたのです。

戦時歌謡

戦争中軍歌が大氾濫しましたが、子どものための戦時歌謡もたくさん作られました。国民学校三年生の時、「勝ち抜く僕ら少国民」という歌が作詞・作曲され、子どもたちに教えられました。私たちは学校で教わるというよりも、ラジオを通じて知らず知らず覚えました。あの頃は食料がなかったので、とにかく増産でした。食料だけでなく、兵器やその他工場生産物を全部増産しなければなりません。「今日増産の帰り道、みんな積んだ花束を、英霊室に捧げたら、次は君らだ分かったか、しっかりやれよ頼むぞと、胸に

響いた神の声」という歌詞でした。そして「勝ち抜く僕ら少国民、天皇陛下の御為に、死ねと教えた父母の、赤い血潮を受け継いで、心に決死の白だすき、懸けて勇んで突撃だ」というのです。天皇陛下の御為に死ねと教えた父母でして、あの頃は子どもに死ねと親が教えたのです。

戦後、名曲をたくさん作曲した優れた音楽家・古関裕而が「露営の歌」を戦中に作曲しました。

弾もタンクも銃剣も　しばし露営の草枕
夢に出てきた父上に　死んで帰れと励まされ
醒めて睨むは敵の空
(露営というのは戦場にあつてのしばしの休息です)

兵隊がまどろんで、夢を見た、すると父上が出てきたのです。「生きて帰るような、そんな不細工なことをしてはいかんぞ、お国のために雄々しく散華して、骨だけになって帰ってこい」—それが「露営の歌」だったのです。父や母は子どもに死ねと教えたのです。どこに子どもに死ねという父親や母親がいます。どこに子どもに死ねという父親や母親がいます。「こない言うてるけどなあ、ほんまはお前絶対死んではいかんぞ。生きて帰ってきてくれよ。お前に死なれたら、わしとお前の母親の老後の面倒は誰が見てくれるんや。頼むさかい生きて帰ってきてくれ」というのが、人間の真実と違いますか。ですが、それを死ねと教えたのです。戦争はマス・ヒステリーを増幅するのです。

国民学校の私たちでしたが「海ゆかば」を厳かな気持ちで歌いました。ご存知のように万葉集で友家持が歌った長歌の中の一節です。

顧みることのない兵たちが陸続として大陸へ、そして南方戦線へと征きました。中国大陸は広大です。行けど進めど麦また麦の、その広野を兵たちは影を落とし、声を殺して肅々と徐州を目指して進軍していくのです。「麦と兵隊」という歌はそう歌詞に綴っています。さらに歌詞から想像しますと、彼らはこの腕を叩き、互いに励まし合いながら中国の空を仰ぐのです。すると見上げる瞳に雲が飛んでいます。思えば遠く離れた祖国です。異郷の戦場でしみじみと知る祖国愛でした。友よ来てあの雲を見よ、というのです。

遠く祖国を離れ来て　しみじみ知った祖国愛
友よ来て見よあの雲を

そういう祖国愛に燃えて、忠勇無双の大日本帝国陸

軍は実に勇猛果敢だったといわれました。

肉弾三勇士

私は一〇年ほど前に『可哀相なお父さんに捧げる哀歌』という本を法律文化社から出し、一五年戦争とはどういうものであったのかを綴りました。忠勇無双の帝国陸軍でしたが、わけても勇名をはせたのは、国民の戦意高揚に最大の貢献をした肉弾三勇士でした。昭和七年に上海事変が起こります。その前年の昭和六年に満州事変が勃発、一五年戦争の始まりでした。昭和一二年、日中全面戦争。昭和一六年、太平洋戦争に突入。そして昭和二〇年八月一五日、ボロボロの敗戦で終わります。その本の中で私が綴ったのは上海事変のことです。昭和七年二月二二日、第一次総攻撃の廟巷鎮の戦場で混成第二四旅団所属工兵第一八大隊の江下武二、北川丞、作江伊之助の一等兵三人は爆薬を竹筒でつつんだ約三メートルの爆雷筒を抱いて鉄条網に突撃、そのまま爆死しました。「戦争と芸能」展の入口のすぐ左手に肉弾三勇士の資料を展示してありますが、その壮烈な死を当時のマスコミはセンセーショナルに報道したのです。感動は精神の醗酵を広げ、人びとを酔わせました。その当時の朝日新聞の見出しを追ってみます。

- 「三勇士の忠烈に感動して／本社への寄託金／早くも一万円突破」
- 「三勇士に対する空前の行賞／一躍二階級を進めて伍長とし／叙位も近く実現」
- 「肉弾三勇士の歌／本社で懸賞募集」
- 「本社の肉弾三勇士弔問／香煙ゆらぐ家に／母堂感謝に泣く／鎌田門司支局長本社を代表／まず江下家を訪ふ」
- 「“肉弾三勇士”、講演会／新宮特派員戦線より帰国」

こういうのが大見出しで載るのです。

著名な現代史家である愛知大学の江口圭一教授は、『昭和の歴史』という小学館から出した本の中でこう書いています。

興行・芸能・ラジオ・出版なども三勇士ブームとなった。なにしろ早くも三月上旬に五社の映画がいっせいに上映されるというすさまじさである。

(二月に肉弾三勇士が爆死して、もう三月上旬には五つの映画会社が映画を製作していますか

ら、一か月足らずで完成したわけです。）

劇場は歌舞伎から新派・文楽などにいたるまですべて三勇士のもので占められ、三勇士ものを上映・上演しないところは“国賊”であると、観客にソッポを向かれた。出身部隊のある久留米では銘酒『三勇士』や『三勇士饅頭』などが売り出され、大阪の高島屋の食堂では、ささ切り大根を鉄条網に、ふきを爆弾にみたてたりした『肉弾三勇士料理』を発売した。

国民挙げてのフィーバーでして、戦意の高揚に肉弾三勇士がものすごい役割を果たしたのです。彼らは縦一列になって魚雷のような爆雷を抱え、鉄条網を匍匐前進しながら爆破しました。実は爆雷には導火線があって、その導火線に火を点けたものを鉄条網をくぐりながら城壁の元に置いて帰ってくるはずだったのです。ところがその火縄を一メートルにしておけば、帰ることができたのですが、上官が誤って五〇センチで導火線を切ったのです。

戦後の一九六五年、当時上海公使館付陸軍武官補佐官であった田中隆吉元少将が東京12チャンネルの「私の昭和史」に出演しまして、この三勇士についてつぎのような証言をしました。

命令した上官がですなあ、爆弾の導火線の火縄を一メートルにしておけば、あの鉄条網を爆破し安全に帰ることができたんです。それが誤まって五〇センチ、即ち半分にしてしまったんです。それで…三人は無残な戦死を遂げちゃったんです。…彼らは完全に爆破して帰れると思っていたんです。

マス・ヒステリーを組織していくために、いわば仕組まれた演出でした。上官の大きなミスで、三人の兵があたら命を落としたことは完全に伏せたのです。覚悟の自爆とした方がどれだけ戦意を高揚させるか。事態は三勇士の後に続けという雰囲気になっていきました。

「欲しがりません勝つまでは」の作者

今も戦争とはどういうものであり、戦中の暮らしとはいかなるものであったかを語る時に、「欲しがりません勝つまでは」という標語が必ずといっていいほど口にされ活字になります。大政翼賛会が昭和一七年に開戦二周年を記念して、決戦標語を国民から募集、集

まった一八〇万余通の中の入選標語一〇編の中の一つが「欲しがりません勝つまでは」でした。選ばれた一〇編は「頑張れ敵も必死だ」「さあ二年目も戦うぞ」「その手休めば戦力鈍る」といったものでした。「欲しがりません勝つまでは」を作ったのは国民学校五年生の子どもで、しかも女の子でした。発表されるや、全国民は身を引き締めました。健気にも子どもが、しかも女の子が「欲しがりません勝つまでは」と言っているというわけで、耐乏生活を余儀なくされている国民に、一層堅忍持久の精神を叩き込んだのです。

大政翼賛会はこれを入選標語に選んだ後、発表するに際してその家を訪ね、「どういう気持ちでこの標語を作ったのか」を聞きただしました。「実は」と応じた父親が言いました。「何とか入選したいと思い、嫁さんの名前や子どもの名前を勝手に使い、国民学校五年生の娘の名前で応募したものが入選しました。娘の名前になっていますが、実は私が作ったのです」とその時告白したのです。しかし、大政翼賛会は「いやこれは国民学校五年生の女の子が作ったのだ、そう葉書に書いてあるではないか」と言って、あくまでも女の子の作品にしてしまいました。彼女は一躍その頃のマスコミの報道対象になりました。新聞社、雑誌社そしてラジオからのインタビューにつぐインタビューの間、父親に言い含められていましたから、「自分が拵えた」と彼女は口ごもりながら言うのです。ですが、心の中では「私じゃない、私じゃない、これはお父さんが拵えた」と言っていたのです。

本当のことを言えなかった戦中の辛さを、昭和二六、七年頃のテレビで彼女は涙ながらに告白しました。大政翼賛会は事実を知っていたのですが、国民学校五年生の女の子の作品と発表する方が、どれ程効果的か知れなかったのです。このように、戦争は真実を覆い隠すのです。ひとえに戦意を高揚させ国民精神を総動員していくために、役に立つものは真実を伏せてでも徹底的に利用する、それが一五年戦争の舞台裏でもあったのです。

一五年戦争を阻止できなかった要因

家永教科書裁判で広く知られた東京教育大学の家永三郎教授は、『太平洋戦争』という著作の中で、どうして戦争を阻止することができなかったのかについて三点をあげています。第一点は中国・朝鮮に対する政策・意識の根本的誤り。第二点は戦争に対する批判的・否定的意識の形成の抑止。具体的には治安立法による表現の自由の抑圧。そして三番目が軍の反民主性、

非合理性です。

江口圭一さんが後にもう一つ付け加える必要があるとして、新聞による排外熱、戦争熱の鼓吹をあげました。私も江口さんの四番目の補足を正解と思うものですが、実はもう一つ付け加えなければならないと、ずっと考えてきました。これは後ほど申し述べることにします。

第一点の中国、朝鮮に対する誤った政策・意識に関して言いますと、日本の文化は朝鮮半島を経由した中国文化によって形成されたと言っているくらい、中国および朝鮮の文化が日本の文化に色濃く反映しています。私たちは明治の二七、八年以前までは日本の故郷として中国や朝鮮を尊敬し、けっして蔑視することはなかったのです。明治二七、八年に日清戦争、一〇年経った明治三七、八年に日露戦争が起りました。実に、日清・日露の戦争を展開していく中で、日本人の朝鮮人や中国人への蔑視が生み出されていったのです。日本文学の優れた研究家であるドナルド・キーンさんが日本文学を分析しながら、日清・日露の戦争が日本人に何をもたらしたかを教えてくれています。この二つの戦争から私たちは「チャンコロ」という蔑称で中国人を呼び、「チョーセン」という独特のイントネーションで朝鮮民族を蔑むようになっていったのです。

漫才と中国人蔑視

漫才を育てたのは、秋田実という方でした。私の大衆演芸の方の師匠—伝統芸能はもう一人別の師匠がいます—が秋田実でした。秋田さんは東京大学を中退されました。マルキシズムのいわば洗礼を受け、労働運動に実際に参加したため、大学を卒業せず、故郷の大阪へ帰ってきて、民衆娯楽の最底辺の世界へ飛び込んでいきました。昭和はラジオと共に幕が開きました。レコードが蓄音機という名前でも普及し始め、映画が無声映画からトーキーになるのは、昭和に入ってからです。

そのような生活文化の中味が変わった頃、漫才はたいへん低水準でして、「父子相対して聞くに耐えず」と言われたように、シモネタが多かったのです。そういうものをなぜ革新しなければならなかったのかと言うと、ラジオの電波に漫才がのって、もし下品な水準の笑いが天子様の耳に届いたなら、えらいことではないかとなったのです。漫才のネタを全部作り変えなければならなくなった時に、芸人さんの力量では手に余ったのです。長沖一や秋田実といった昭和の若い知識人の頭脳や手を借りなければ、漫才の革新はできな

かったのです。

秋田さんはマルキシズムを通過した人だけに、当初は戦意高揚の漫才は書きませんでした。そうではなく結婚や出産、進学や就職、そしてスポーツといった日常生活をテーマにしていたのですが、戦争そのものが生活の日常になると、次第にその中へ巻き込まれました。そうになると、戦争すなわち日常生活ですから、戦争をテーマにむしろ戦意を高揚させるような漫才を書くに至るのです。いったん筆を染めたら、後は止まるどころがなく、新聞や『週刊朝日』『サンデー毎日』などの週刊誌に次つぎ発表しました。

当時の文献を図書館で調べ、私の雑誌『上方芸能』に「冬の時代の笑い」として特集したことがありました。それは秋田さんの功罪を明らかにしようとした企画でした。秋田さんは私の師匠であります。弟子から恥部を突かれたわけですから、秋田さんは実に嫌そうな顔をしていました。「隠していることをお前、暴くことはないではないか」とは口にはしませんでした。[「そこまでお前はやるのか」という—あの時は私も辛かったのですが—そうした眼差しでした。

たとえばこういう漫才です。

「寝るといえば世界中でどこの国が一番寝坊やろう」
「そらまあ支那でしょう」
「支那が一番寝坊？」
「そうですよ。何しろ目ざまし時計が支那で一番売られてるそうですから」
「へー、それは初耳や」
「君は割合に物事にうといね」
「戦地の皇軍から来る便りにも、みな書いていますよ」
「ほー、どんな風に」
「このたびの聖戦は、眠れる支那の眼を醒ませるのが目的やと」
(さらに秋田実はソ連のことを「葬礼」と称します。大阪では葬式のことを「葬礼」と言います。)
「病気の支那に葬礼屋が様子を見に来ます」
「なるほど、碌でもない葬礼屋は駆逐して支那を健康にしてあげねばなりませんね」
「東洋平和のために隣邦支那を健康にしてあげねばならぬ」
「そのためには、何よりも先ず、寝坊の癖をやめて、早起きすることです」
「さあ支那よ、大陸の総てのものは、いま朝だ、元氣よく起きなさい」

というように、戦争のお先棒を担いで、秋田さんは戦争協力者にだんだんとなっていったのです。

軍部の芸能への干渉

三番目の軍の反民主性、非合理性です。歌手の灰田勝彦が一五年戦争時「煌めく星座」を歌いました。「男純情の愛の星の色」で始まる歌詞は「思い込んだら命がけ男の心」と歌ったものです。陸軍は灰田勝彦を呼びつけ、「何事だ」と一喝、怒鳴りあげました。「愛の星の色とは何だ。陸軍の象徴が星であることを貴様は知らんのか」。ナチスのハーケンクロイツと同じことだったのです。「男と女の恋の歌に、わが陸軍の星を使うとは何事だ」というわけです。しかも思い込んだら命がけ、「たかが女一匹に命を懸けるとは、この非常時をどう心得ておるのか、馬鹿者」と怒鳴りつけられたのです。

中島健蔵という文芸評論家でしたが、私どもは「冬の時代の笑い」の中で彼の怒りを紹介しました。中島健蔵は内閣情報局の軍人たちに呼ばれ、丹羽文雄はけしからんという話を聞くのです。中島が「あなたたちは丹羽の何という作品を読んだのか」と聞きますと、「あんな汚らわしいものを読めるか」と言う。では「丹羽に会われたのか」と聞くと、また「汚らわしい、会えるか」と言う。中島健蔵は抑えに抑えていましたが、たまりかねて顔から血が引き、口の端が引きつってくる自分が分かったけれども、しかし言わなければならない。「読みもしないし会いもしないでいかに言うのは乱暴だろう」とやっとのことで言葉が口からでたわけです。軍人は攻撃を受けて意外そうに顔を覗き込みながら、「ほおー、面白いことを言うのう」、そして軍刀でドーンと床を突くのです。戦争という時代は問答無用だったのです。

マス・ヒステリー下の芸能

私は江口圭一さんが言われた、新聞による排外熱・戦争熱の鼓吹の他に、更にもう一つ付け加えなければならないと考えるものです。「一億一心火の玉だ」という標語が全国に広がりました。「国民精神総動員」といわれてマス・ヒステリー状況に国民は追いやられ、巻き込まれました。マス・ヒステリーの醜態状況下であって、批判するよりもむしろ積極的に戦争に協力するようになったことを、戦争を阻止できなかった第五番目の理由にあげなければならないと、私は考えるのです。

芸能あるいは芸術の領域において、大勢の人間ある

いは団体が戦争に積極的に協力したことを認めざるをえないのです。もしも皆さん方が、あの一五年戦争の愚劣さに芸能界あるいは芸能人が雄々しく、また頭脳的に抵抗し、反戦平和の動き・機運の何らかの表現が、「戦争と芸能」展にあるに違いないと思って見ると、失意を感じられるはずですが、全然なかったとは言いませんが、むしろ喜んで戦争のお先棒を担いだと言って間違いないと思います。

安齋先生の資料の中にも、作曲家・古関裕而が、戦争の提灯持ちをした一戦後いささかは反省されたとしき気配もありますけれども一ことが出てきます。さきほどの「露営の歌」は古関裕而の作曲です。あの人は煽りに煽る人でして、「おーおー、おーおー、阪神タイガース」の「六甲おろし」は昭和一二年の作曲です。そして、八月の高校野球の大会歌「ああ栄冠は君に輝く」の名曲を作っていますが、彼はまた「ラバウル航空隊」を戦争末期に作曲しました。何よりも、特攻機で突っ込んでいく若者を鼓舞した「若鷺の歌」、即ち予科練の歌を彼は作曲したのです。戦中の若者を煽りに煽った彼が、戦後作った歌が「長崎の鐘」です。「煽つといて鎮魂はないやないか、なんちゅうことしなはんねん」と言いたくなる作曲家です。

肉弾三勇士で申しますと、文楽も歌舞伎も肉弾三勇士を演じましたが、今日ではどうも考えられないことです。なにしろ、歌舞伎役者が軍服を着たのです。歌舞伎は、現代劇ではありません。あれは近世の江戸時代の風俗劇ですから、みな着物を着ています。歌舞伎には型があって、様式美で歌舞伎は定まっているわけです。ですから見栄ですとか、六方ですとか、あるいは隈取りですとか、非常に目立つように誇張するのです。その型の美しさがあるため、軍服を着て「はっ、自分は何々でありますっ」というような現代会話には適さない芸能なのです。一方、文楽では、全部着物に合うように人形はできています。肉弾三勇士では人形が軍服を着るのです。何という無残なことでしょうか。これを文楽自らが進んでやったのです。

<動員>は戦争用語

最後に、どの雑誌にも編集後記がありますが、『上方芸能』では編集前記があって、それを私が担当しています。雑誌『上方芸能』の最新の一三八号に、書いたことを少しお話しして、締めにします。

関西と関東のコンサート数を比較すると、関東が一日あたり三十三・九回であるのに関西は十

二・一回。関東に比べコンサートに使いやすい中規模ホールは関西に少なく、大阪城ホール（八千人級）や大阪ドーム（二、三万人級）は大き過ぎる。そんな事情を調べた『ぴあ』を紹介しながら朝日新聞（二〇〇〇年八月二九日）はこう綴る。「（キャパシティを問わず）規模に見合った動員が期待できる公演は少ない」と。

公演の多い少ないはこの際別問題とし、〈動員〉なることばの多さを問題にする。

読売新聞は三日後の九月一日、寅さん人気の秘密を分析した大阪市大研究者グループの研究をレポートして、「（全四十八作品で）約八千万人を動員」と書いた。何のためらいもなさそうに大新聞が〈動員〉を使うことに僕は違和感を覚え続けてきた。

大新聞だけではない。日本映画空前の大ヒット、配給収入一三三億円、一作品としては映画史上トップを記録した宮崎駿監督の『もののけ姫』は平成九年、「邦画観客動員数一位。アニメおそるべし」（別冊太陽「ヒーロー・ヒロインの映画史」）と驚嘆される。あるいは宝塚歌劇団史上、最大の人気だった「ベルサイユのばら」は、昭和版と平成版とを合わせ、計三〇〇万人という大記録、さりながら「平成版の観客動員数は一四〇万人」（別冊太陽「宝塚・タカラジェンヌ一〇〇」）と平成の評価者はくやしがるのである。

あらゆるイベントはもちろん、興行の正否は動員数の多寡で総括される。なぜ〈動員〉に僕がこだわるのか。広辞苑を引いてみる。「動員—①軍隊の平時編成を戦時編成に移すこと。戦争に必要な諸機関を編成し、特に兵士を召集すること。②戦争目的遂行のため、国内の資源や人間を統一管理のもとに集中すること。③転じて、ひろくある目的のために人や物を集中すること」と。

広辞苑の説明通り、〈動員〉は戦争、わけても

いまわしい十五年戦争の記憶や歴史と深く結び付いているのである。日中全面戦争が始まったのは昭和二年七月七日。「銃後」と呼ばれた国内では「拳国一致」「堅忍持久」「消費節約」を三本柱に「国民精神総動員運動」が上から組織されていった。翌一三年には「国家総動員法」が議会を通過、ヒステリックな総動員体制は悲劇の学徒動員を発動させたのである。

芸術や芸能の享受に人はいったい〈動員〉されて赴くものであろうか。だれだって見たいから、聴きたいから足を運ぶのである。そんな自発的自由意思を踏みにじり、〈動員〉する権力を興行やイベント関係者が与えられている訳ではないのだ。

そこで呼びかける。〈動員〉なる不愉快なことばに代わって「集客」を用いようではないか。その催しの規模を表すには「観客数」でよく、能動的目標では「集客数」が妥当だ。わが編集部では早くから〈動員〉を使わず、右の二語で表現してきた。

九月三日、石原「帝都」主義者の制圧する銀座を自衛隊のM7・2型装甲車が走った。

悪夢が甦ればこそ、〈動員〉を葬らねばならぬ、と切に。

というのが編集前記でした。

忌まわしい戦争の亡霊が、日常的に再三使われる〈動員〉という言葉の中に、今も生き延びています。一刻も早く、だんだんきな臭くなってきた今日であればこそ、「動員」を葬らなければならないと申し上げて、私の話を終わります。ありがとうございました。

（講師 立命館大学産業社会学部教授）

（特別展「戦争と芸能」記念講演会の基調講演に加筆・訂正したものである）